

送る側より

第九回キブツ研修生合宿報告

日本協同体協会

合宿研修の主旨

第九回キブツ研修生は、例年の通り『月刊キブツ』の会員を中心に募集したところ、応募者が百六十余名もあり、選考の結果、合格者が九十二名であった。合宿研修会はオリンピック記念青少年総合センター内で開催することになり、会場の都合と研修生の便宜も考慮して十二月中旬と一月中旬の二回に分けて、おのおの六日間の研修をした。

この合宿研修の目的は、第一にキブツ研修の主旨徹底であり、第二にグループの結成であり、第三に旅行準備の話し合いであった。遠い一万数千キロのあなたにあるイスラエルに、往復旅費数十万円もかけて、キブツという独特の協同体社会の実習研究に行くのであ

るから、絶対に悔いのない研修目的を達成して貰いたいと願っている。またキブツはグループ生活の一典型であるから、その研修に行った研修生グループが円満を欠くようでは、キブツ研修そのものがナンセンスに終るので、短い協同生活ながら、おおいに友情をつちかっ

合宿次第

二回の合宿ともに、あいにく協会理事長の宮部一郎は出席できず、手塚信吉常務がその任に代った。イスラエル大使館より、ガビツシュ参事官が招来され、かくも大人数のイスラエル、キブツ研修生の相互にとっての意味、役割、など簡単な話があり、イスラエルへの歓迎の辞をもって話をしめくくった。



そのあと手塚常務より、多年のキブツ派遣の経験にかんがみ、主旨説明の話があったので、それをここに記して合宿の報告、ならびに研修生に対する協会の立場の説明に代える。

冒頭のあいさつ

「なぜキブツに研修生を送るか？」
手塚 信吉

皆さんから「なぜキブツに行きたいか」という応募論文の提出を求めましたので、私も「なぜキブツに研修生を送るか」という理由を説明する義務があると存じますので、それをこれから話の題と致します。あとで遠慮なく質問して下さい。まず皆さんの論文を読んで感じたことは、第一回研修生から、今回の第九回研修生の論文を比較してみても、年と共に時代の動向が切迫感を加え、キブツ研修生を送る責任の重大さを痛感する次第であります。皆さんはいまだ社会体験も浅く、世間をみる眼も純であり、複雑怪奇な政治や経済のカタクリにも関心が少なく、物の見方も考え方も単純なように思われますが、せっかくキブツ研修生として、遠く地中海沿岸のイスラエル国に行くのですから、キブツとは何か、キブツの時代的な意義、そしてキブツ研修の価値について悔いなきを期して貰いたい。そのために大切なことは謙虚さであります。

毛沢東選集を読んで感心するのは、歴史に

対しても、先人の言行に対しても、忠実謙虚に取り上げていることであります。あの大人物にしてしかり、我われはもつとものと、何事にも謙虚でありたいものです。それでなければ、キブツのような先行した思想文化は理解できるものではありません。

毛沢東の有名な言葉に「何か偉大なことをするには、金がないこと、地位がないこと、若いこと」この三条件が必要だと言っております。これは皆さんにぴたりではありませんか。世間一般の人は、金が無いから何もできない、地位がないから損だ、と思い込んでおりますが、よく調べてみると、毛沢東のいうとおり、大偉業を成しとげるのも、大発見大発見するのも、大半は無名文なしの若者の発ぶんによるものであります。日本に於ける協同体運動にしても、金や地位のある人はみな反対でしょう。自分の損になるキブツ運動などするはずがありません。皆さんに期待するのはそのためであります。くれぐれも注意しておきたいのは、キブツに行けば何か有利なことがあるとか、得をするとか、そんな考えをもって行くとか失望します。キブツは利己心を捨てるところであります。

私がキブツを視察したのは一九六二年です

一端を告白しますと……。

私は少年時代どん底からはい上がり、ちょっと類例の少ない波乱苦難の体験をもち、文字どおりの七転八起の死闘を繰り返して、六十余年という永い無駄な経済闘争に終始して参りました。それが私一人なら不運と諦めもありますが、かなり手広く事業をやりましたので、友人知己、同業者と何百何千人の末期を知っておりますが、資本主義経済という対立葛藤の社会で、奪ったり奪われたり、勝ったり敗れたり、折角の富も不況の一波で崩れ去ったり、大半の人々はアブハチ取らずに終わっております。

仲良く協力すれば、この狭い日本でも困る人も不幸な人もなく、相当な文化生活も可能であるのに、国家も個人も私欲私利の鬼となつて奪い合い傷付け合いながら、千人に一人の成功者もない。たまたまもうけた奴もせいぜい十年か二十年で必ず没落して、かえって子孫にまで泣きをみせる。そんな繰り返しが人間共の宿命となつているのであります。

そこで私は自分の事業内だけでも、対立のない運命共同体社会を実現してみたいと考えて、血の出る思いの苦心もしたが、周囲の風潮や、経済事情に歪められて、完全な実行を

みることができないばかりか、かえって自分まで業界を引退するようになりました。社長引退後も、対立社会の解消に一生を捧げる決意をして西欧各国の農工経済の研究視察に出かけて、その帰りに、イスラエルに立ち寄ってキブツを知り、これだと飛び付いたのであります。

人類は協同体化以外には生きられない時代となった。地球は一寸も大きくすることはできないのに人口は二百年で六倍に増えた。更に三十年後には今の二倍になると予想される。しかも文化生活の一般化で、人間一人あたりの消費エネルギーが二百年前の二十倍になっている。乱費文明と言われる、利潤追求本位の資本主義経済は人類最大の癌となつてきた。この現象に気付かないのは人間の私欲に原因している。

世界の人口が六億人時代に資本主義文化が発達した。そして一億白人が五億の有色人種を搾取する自由競争で資本主義文化も経済も異常に発展した。当時は北米大陸でも人口はわずかに百万人足らず、土地でも資源でも奪い合いの競争が、かえって開発に役立ち、それが人類全体を益する結果ともなった。南米でもカナダでも太平洋州でも皆同じであった。

から十年前になります。当時日本では注目する人もありませんでしたが、私は一見してアツこれだ！これこそ新時代の人類が求める生活原理だ。ぜひともこれを日本に普及しようと考えたのであります。帰国早々友人知己に協力を求めましたが、理想の夢と一笑にふすもの、共產主義だと警戒するものばかりで、だれ一人賛成してくれるものはありませんでした。その後六ヶ月あとも拙著「新しい農業キブツ」が世界ジャーナル社から出版発売されてから（キブツの本としては日本最初のもの）読者から六百通からの共鳴賛成の書面が参りまして、それに力を得て、日本キブツ協会を設け「月刊キブツ」の発刊となりました。それから読者からの求めに応じて、北海道から九州まで、いや韓国までもキブツ講演会、座談会幾百回か、いたるところで相当の反響があり、ようやく各方面から共鳴者を得て、社団法人日本協同体協会を設立したのが、一九六六年十月であります。私が世間からも友人知己からも回避されたり一笑にふされながら、多大の私費を投じてキブツ思想普及に老後を打ち込んだのは、永い苦しい過去の経験からであります。こんな私事はめつたに話したことはありませんが、若い皆さんの参考に

日本でも百年前の札幌なら思いのままに無償払い下げであった。東京でも山手方面なら坪一円以下でも税金を恐れて買い手がなかった。そんな土地が今では坪十万円二十万円となっている。派生的な原因も色々あるが、根本的には人口増加が最大の原因であります。国連発表の世界人口三十五億七千二百万人。それが二十一世紀初頭、即ち三十年後には八十億人と推定されている。

それでも科学文化の発展で生産力が増加して物資も食料も不足ないというが、それは公平な分配が条件であつて独占欲、奪い合いを中心とする資本主義経済では人口五十億になつても重大問題が起こるという。現在の世界は百三十六ヶ国、内、人口が二倍になつても土地も資源も余裕のある国は、南北アメリカ、ソ連邦、太平洋州外五十ヶ国ぐらいのもので後の八十六ヶ国は人口間引き政策か、国外進出の外はない。世界一家が大戦争か二者択一の運命が目前に迫っている。

超大国でありながら二世紀にわたって列国の半植民地にされ、内乱常なく貧困と飢餓に苦しんでいた中国が、共產革命成つてわずか二十余年で、低水準生活ではあるが、八億国民一人の失業者も飢民もなく、犯罪もなく、

社会不安もなく、人類史上空前の治国平天下、これぞ人民公社を中心とした協同体社会の恩恵である。今の日本のような搾取と不労所得を正当化した、金持ち本位の不平等社会は、どんなに繁栄にみえても蟻の一穴からでも崩壊する。このままでは、中国大陸の思想文化の奔流には耐え得ないであろう。

皆さん御存知ですか？他国のことではない。一ヶ年の政治献金三百億円、五当三落は公然の秘密、一回の選挙費用一億円はザラである。そんな資金の出所を想像しただけでも、貧乏人に味方をする政治が行なわれるわけがない。だから、まじめに働く者が損をする。正直者が馬鹿をみる世の中がいつまでたっても改まらない日本である。毛沢東さんの全財産は常用服と万年筆一本だけ、そして中国革命の成否は子孫三代清潔政治後に定まるのだと戒めている。政治の要点を清潔におく、正に一代の達見である。不潔政治の日本がこのまま無事のはずはありません。

だが、私利私欲のとりことになっている日本の大人の世代ではどうにもならない。物欲に汚れない心の持ち主である、青年男女の良心の発動に待つ外はない。人間平等観に徹した労働尊重の社会キブツこそ、青年の良心を育

てる温床となるであろう。研修生の意義はそこにあります。

私がキブツを語る時、素晴らしいという言葉を使うので、キブツに行った研修生から抗議の声を聞いたことがある。だが今日でも私はキブツを素晴らしいと思っている。しかし私の言う素晴らしいは、絵空事の天国や極楽の素晴らしいではない。人間が良心的に生活できる素晴らしい、すなわち自由平等、搾取も不労所得もない。みんな仲良く働いて、病気になっても怪我しても老人になっても、何の不安もない社会、それがキブツでは確立されている。素晴らしいと言っているのはそれなのであります。

金さえあれば馬鹿でも不徳漢でも、ぜいたくも浪費も自由勝手、大学にも行ける、妾宅も持てる、大臣にもなれる。地獄のさたも金次第、他人の不幸など知らぬ顔、そんな日本が好きなのがキブツに行っても仕方がない。資本主義的人世観でキブツをみると、汗水たらしてただ働きするキブツ人が馬鹿にも見えよう。だがキブツの人世観では、神聖な労働を切り売りする賃金労働が汚れてみえる。どちらに人間の良心が味方するか、キブツで三日働いてみるとすぐ判る。

日本人には私有財産を持たないキブツ人が不可解に思う人が多いが、それはキブツ人が無欲だからではない。目先の私欲を捨てることが永久の安全を保つことになることに気付かない。個人的に何億もつけても、それを三十年保つこともできないことは統計が教えている。キブツの共同財産なら人の世の老病苦死に関係なく、集団の力で永久に保たれて子々孫々まで安泰である。永遠の生命は個人にはないが協同体にはそれがある。人生観を変えないとキブツは判らない。

だがキブツの判る人世観でなければ人間の真価が判らない。人間が良心的に生きる喜びを体験する、絶好の人生道場、それがキブツであるが、そのキブツを理解するには謙虚でなければならぬ。謙虚を忘れては自分自身もみえなくなる。皆さん謙虚にキブツをみてきて下さい。時代は強く皆さんに味方してあります。それを固く信じて下さい。信こそ克己心となり勇氣となり、謙虚ともなり、成果に結びつきます。最後に皆さんの健康を祈り私の話を終わります。

潮流 全協連のあゆみ

昨年の秋、九つの小共同体（農業協業経営体）が集まって、相互の発展のために協力しあう連合組織「全協連（全国協業経営体連合会）」を発足させたことは、すでに本誌十二月号で知らせた通りである。その後、養鶏部会や相談会が開かれるなど、全協連加盟の団体相互には活発な交流がおこなわれている。また、香川県で孵卵場を営んでいる「四国ソーンバー」も、全協連の会員として新たに加わった。

最近では、一月一六日から五日間、香川県の東山産業を会場にして、理事会と経営研修会とをかねた会合がおこなわれ、全国から集まった十数名の参加者が熱のこもった話し合いをかさねた。この会合では、「全協連の運営」「諸規定の統一」「計数管理」「経営目的」など多様なテーマが検討されたが、ここでは、参加者の発言のなかから、全協連の歩みつつある方向をさぐってみよう。

まず、自分たちの置かれている現状につい

て——「日本では農業そのものが、国際競争

や他産業との関連のなかで大きなカベにぶつかっている。自分たち農民自身の力で、この窮状を打開してゆかねばならない。その際、営利追求本位の資本主義的な農業のあり方は、根本的に変えてゆかねば、農業ばかりでなく地球の自然そのものも破壊してしまうことになる——」。この危機感は、会合の二日目に香川県の農業経営者多数とともに聞いた農協中央会会長の宮脇朝男氏の講演の中でも強調されていた。第一次産業としての農業を本当に生かすためには、従来の考え方を根本的に転換してゆくことが、今、必要なだろう。

このきびしい現状に、各共同体がどう対応していったらよいのか。——『良品廉価のものを合理的な経営のもとにつくり出してゆることが、まず必要だろう。そのうえ、第一次的な生産にたずさわるだけでなく、中間搾取を排除して、生産・加工・販売までの一貫体制を、われわれ自身がつくり出してゆくことだ。また対内的には、共同体の中の一人一人が生きがいを感じ、全体的にも解放的な雰囲気がかもし出されることが大切だ。こうして自分たちの身近かなところから発して、よい地域づくり、社会づくりをしてゆく——』。

全協連では、今、卵の生産—販売の一貫体制を真剣に模索しているところである。

こうしたことをなしとげてゆくためには、最終目的がしっかりと定まり、それをなすべく人たちの姿勢が重要なのだという。——『金をもうけてやろうという目的では、大したことができない。皆がしあわせに共存して生かされる社会を創ってゆくんだという最終目的を、しっかりと根づかせるところでおさえ、おけば、よい幹が育ち枝がのびる。と同時に、こうした仕事にたずさわる者がたえず自己解放に努め、一人一人の人間を大切にしようという事態にも無固定の気持で対応してゆける人間になってゆくことだ。無固定の姿勢からこそ、本当によいアイデアが生まれる。また、自分たちのやっていることに不安をもたずに、共存のあり方でやってゆける——という自信をもつてやってゆくと、不思議に道が開けてくるものだ——』。

こうした《人間哲学》とでもいえるもののうえに実践がつかまされられているのが、彼らの強みのだろう。このような全協連の動きは、農業のあり方についてだけでなく、新たな共同体社会をつくってゆく上で、重要な示唆にみちているといえよう。

《備北共同体》の新たな出発

本紙でも何度か名前が出たことのある「備北共同体」が、この四月から数人の若者たちが定住者として入植して、いよいよ本格的に出発するという。筆者は、一月の中旬に香川県の東山産業で開かれた全協連の会合（21頁参照）からの帰途、それを思い出して、岡山から伯備線に乗り換え、中国山脈のド真中にある小さな開拓地「備北」へ向かった。

山間の小駅備中神代から歩いて二時間あまり、人里離れた山道を汗ダクになってやっと備北開拓地に着いたところには、日がとつぷりと暮れていた。ところが、ここにある数軒の人家のどれもしつかり戸じまりされて人影なく、放しがい羊がそばへ来てなくばかり。夜道を下の村まで引き返すのも容易でない。野宿を覚悟してタキ木をさがしていると、遠くの方に光が見えた。胸を躍らせて行ってみると、果たしてそれが目ざす家だった。イロリ端でただ一人火を

おこしていた留守番役の難波君は、「これ十日ぶりに人間に会えた」となつかしうに笑っていた。開拓団の他の三軒の人たちは、冬の間は山をおりてしまっているのだという。

ここは、戦後満州から引き揚げてきた人たちが十数人入植した開拓地だが、その後ほとんどの者が離村してゆき、入植当初から現在まで残っているのは二戸だけだという。行政の貧困さと時代の波に洗われて、お定りのコースを歩んで廃村化してしまっただろうか。

この僻村に、一昨年の夏に三ヘクタールあまりの土地と立派な（？）家を手にいれたのは、今井真治君という今年岡山大学の農学部を卒業する若者である。名実ともに備北共同体の創設者と呼べる人物だそうである。彼については、昨年の本誌七月号で尾関弘君がくわしくふれているが、高校のころから集団農場・共同体を建設することを

志し、ねばり強くその実現に向かって歩んできたのだという。そして、苦心のすえ五六年も使われていなかった現在の土地を購入して、たった一人でカヤや笹を刈り払い農場づくりをはじめたのである。

こうした今井君の歩みと、関西でS C Iや月刊キッツ関西読者会にあつまっていた人たちの共同体建設への関心が、尾関君をなかだちにして結び合い、昨年の春あたりから大きな展開をみせはじめたらしい。それ以来、何回かの援農キャンプがくりかえされ、とくに昨年の夏には一月半にわたって約百名の参加者をあつめてキャンプがおこなわれ、農場が整備され、備北共同体に心を寄せる者がふえ、共同体としてのイメージもさまざまにふくらんできたという。

筆者が翌朝起き出して、深い霧をすかしてあたりを見廻すと、ゆるやかな傾斜の真中を柵に囲まれた十五アールばかりの野菜畑が占め、左手のより急な傾斜面は栗林になっていた。この山奥の三ヘクタールの傾斜地で何人かの若者たちが農業だけで生計を立ててゆくのは並大抵のことではないだろう。備北開拓を選んだ理由として、今井君は「備北がもともと条件的に困難が多い

と判断したからだ」と言ったそうだが、この言葉の重さの中に、彼がやろうとしたことの質をかいまみることができるよう気がする。ここでは、きびしい日々の労働を通して、本気にへいっばしの百姓になる気がまがえが必要だろう。農場づくりを模索しているばかりにとっても、ここでの試みは非常に刺激的である。

一月のはじめ、大阪で「備北共同体運動」のこれからのあり方をめぐってステイ・キャンプが開かれ、この運動を担う主体として「備北百人委員会」がつくられることになったそうである。その「宣言文」を次に引用してみよう。

「備北を中心とする共同体運動を持続・展開する運動主体として、備北共同体運動百人委員会」を作ります。

備北共同体が、共同体に生活する数人によつてのみ支えられるのではなく、備北共同体運動の意味を認める共同体内外の個人、備北共同体と部分的・全体的に関わりをもつ個人が、等しく発言権をもつ、運動主体としての百人委員会によつて支えられます。備北に生活して共同体運動に参加する個人

も、「百人委員会」のメンバーの一人としての発言権にかわりありません。

百人委員会は、共同体運動の展開のための具体的行動を組織・運営する実行委員会を必要に応じ組織し、「販売」「調査」「資金」「労働」等の面において、備北との関わりを追求しつつ、一方でさらなる共同体運動の発展のために、第二・第三の備北を都市に農村に創出するべく運動します。

百人委員会は、それを構成する全てのメンバーの意見・情報をできるだけ吸収し、それを全員のものにするための出版・理論活動も行ないます。

と勇ましいもので、具体的にさまざまな活動が提起されている。ここには、備北共同体を閉鎖的なものでなく、共同体と外部の世界とが相互に働きかけあう開放的なものにしてゆこうという姿勢がうかがわれる。共同体としての備北をどのようにしてゆくか、今井君は次のように書いている。

「……農業というものの性質からいって、生活と生産とが相重なっているということも備北の性格づけの一つとなるかと思う。いわゆる通勤農業という型はとりたくない。次に問題になるのは自主性・自立性、自

発性。……備北自身の経済的自立性は何よりも基本であることは云うまでもない。

創造性ということも新しいものを生み出すとするなら当然要求されるのではないか？ 特に販売をも含めた共同体建設のためには、もともとそうした方面での勉強とそれに基礎をおいた創造性がほしい。

《運動》の面から連合ということを考えていかなければならないのではないか。たとえ共同生活をとらなくてもとれなくても、何らかの分野で働いている人達と連合していつて備北という「へき地」の閉鎖的傾向を自ら打ち破ることが必要に思う。

以上、《生産―生活―自発―創意―連合》を備北五原則と考えています。

山奥の朝のさわやかな大気につつまれて下山しながら、ぼくは自分がここにどうかかわれるのか、あれこれ考えていた。基本的には、ぼくら自身で共同体をつくり出してゆくことで、この動きに添えてゆくしがあるまい。ともあれ、このきびしい生活条件のなかでの日々の営みのなから、彼らがどんなにたくましい共同性を創りあげてゆくに、何よりも期待し注目しつづきたいと思う。